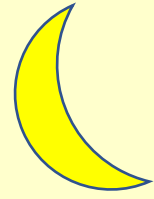


『青猫』



『青猫』（新潮社）は1923年に刊行された朔太郎の第二詩集です。『月に吠える』に共通する孤独感に加えて、「憂鬱」が詩集の重要なキーワードになっています。

『月に吠える』から『青猫』を出すまでの間、朔太郎は郷里である前橋で過ごしました。この期間を朔太郎は「陰鬱な梅雨時」として、無気力な生活のなかで、哲学書を読みふけり、人生の意味について考えていたと述べています（「青猫を書いた頃」）。特に1915年春から一年間は詩の発表もなく、文壇仲間との交流も途切れていました。朔太郎は1919年に結婚をしますが、その後も、そのような生活は続きました。

『青猫』の詩に書かれた風景にはそんな朔太郎の「憂鬱」が投影されています。



『青猫』（1923年 新潮社）